

ジョン・ニコルズの『卵を産めない郭公』と村上春樹 —村上柴田翻訳堂の意義

山口 政幸

1、村上春樹の翻訳をめぐる近況

2017年3月に、中央公論新社から出された『村上春樹翻訳（ほとんど）全仕事』は、この作家がデビュー以来営々と積み重ねていった翻訳のほぼ全貌の姿をよく表している。それは35年で、70冊に及ぶという相当な数の分量である。村上という作家は、自身の書くものを自己の厳しい管理下に置くことを、誰にもまして実践している作家だが、この翻訳という仕事に関しても、やはり解説を施していくのは、まず自分自身であって、他人をそこに介在させることはなかった。言葉を換えれば、彼の三年おきくらいの周期で出される小説とそれに付随するエッセイや対談と同じように、そこには、彼以外の言説が差し挟まれる余地はほぼないような状態が続き、村上が折々に開示する言説のみが、ちょうど、暗い海で時おり放たれる灯台の灯のように、読みの方向性を定める基準値と化していった。

が、翻訳の場合には、その当初から、そこにもう一人の存在として、柴田元幸という稀代の翻訳家が付いて回るのが不可避な事柄だったのを、この本はよく伝えている。柴田とは言うまでもなく26年間に及ぶ東京大学での教授生活を終え、自身で創刊した雑誌『MONKEY』（スイッチ・パブリッシング社）の編集を中心に、現在もなお、夥しい数の翻訳を送り続けている現代アメリカ文学の翻訳家である。村上より5歳年下の柴田は、それまでの東大教授に見られたような翻訳の活動を受け継ぎながらも、70年代、80年代のカウンターカルチャーの洗礼を受けた、新しいタイプの学者系翻訳家で、いわゆる文芸批評家を兼ね備えるような従来型の学者とは括れない存在である。なにより、その異例なほどの多作をもって知られている柴田とは、文字通り現代における翻訳業界の第一人者と言っていい存在に違いない。柴田のサポートは、村上の初期翻訳であるジョン・アーヴィングの長編小説『熊を放つ』を複数人でチェックしたことから始まり、次のポール・セローの『ワールズ・エンド(世界の果て)』からは単独でのチェックを始め、その後ながきにわたり、村上の翻訳のサポートとして彼の訳業を支えてきた。村上はそれをこの本の中で、「柴田先生が僕の大学だった」と率直に認め、惜しめない感謝を送っている。

そして、2016年10月に行われたこの対談の、ちょうど半年前から刊行が開始され始めたのが、村上柴田翻訳堂という新潮文庫による新しい翻訳のシリーズものだった。そこでは、村上

春樹と柴田元幸によって選ばれた 10 冊に及ぶ英米小説がリニューアル化され、およそ 1 年余りの時間をかけて定期的に刊行されていった。10 冊中、村上と柴田が新たに訳したものは 2 冊ずつ、合計 4 冊分である。刊行開始の 2 冊分は村上による「訳者解説」、柴田による「訳者あとがき」があるのみだが、そのあとの 8 冊すべてに、村上と柴田による「解説セッション」という名の対談が、旧訳者の解説文のほかに、付け加えられている。(ただし、1 例を除き、新潮社以外の他の先行訳の場合は、その解説文が載せられることはない) およそ 1970 年代あたりには単行本や文庫化されながら、その後ながく絶版状態が続いた翻訳を復刊させることで、名作や時代的意義のある作品を忘却化する出版業界に一石を投じようとした企画とも評価できるが、何と言っても当代の読者の関心事は、村上や柴田といった現代翻訳の牽引をなした重鎮の二人が、若い頃、どのような英米の小説に魅力を感じ、それらをどのようにして理解し消化していったかを、この対談を通じて知ることにあるだろう。

実は、こうした回顧的な企画は、もともとは、柴田の責任編集を務める『MONKEY』vol.7 (2015 年 10 月 15 日、スイッチ・パブリッシング) で行われた「帰れ、あの古典」での対談が起点となっていた。そこでは、村上が自身で所有する英米作品の翻訳を写真入りで紹介し、「復刊してほしい翻訳小説 50」と題していた。如上の村上柴田翻訳堂の作品は、実はすべてここに含まれているのである。しかも注意すべきことに、この対談自身は、2014 年 11 月 21 日に、「新潮クラブ」で行われているのだ。つまり、この時点ですでに新潮社の企画は動いており、むしろその一環としてこの「帰れ、あの古典」の対談は持たれたと考えられる。自社の「新潮クラブ」で行われた対談を、1 年間活字化せずおいたうえで、柴田個人の雑誌にだけ掲載を許すというのは、新潮社側の破格の厚遇ぶりを示していることにほかならない。

『村上春樹・柴田元幸 新訳・復刊セレクション』と当初呼ばれていた翻訳復刊の企画は、こうしておよそ 1 年 5 カ月を経過して、『村上柴田翻訳堂』となり刊行されるわけだが、この多様に広がりを見せる翻訳ものすべてをここで取り上げることは、不可能に近い。そこでここでは「青春小説」として村上がつよく推奨した、ジョン・ニコルズの『卵を産めない郭公』のみを取り上げて論じていくことにする。村上柴田の二人の行う「解説セッション」は、作者の来歴や作品の持つ時代背景、また先行訳や映画化の問題など実に多岐にわたった範囲に及び解説の幅を広げていくが、同時に自身のその英米小説や翻訳との出会いの原点を明らかにしていくため、彼らの文学形成や文学観の発生、その変遷を知るうえで、看過できない重要な素材を与えてくれるものともなっているのは、先に記したとおりである。ここでは、村上がこのシリーズの掉尾として彼自身が翻訳を手掛けた『卵を産めない郭公』をたどることで、その作品世界や翻訳の姿勢についての検証を通じて、メインストリームと村上自身がつねに考えている彼の長編小説作品への架橋という問題も最終的には視野に入れて考えていきたい。それは、拙稿で

の目論見と達成はともかくとして、村上春樹の創作を考えるうえで、その創作の半分に当たると見なしてよい彼の精力的な海外翻訳小説を、これからはもっと積極的に視野に入れ、彼の作品を論じるべきではないかという、一つの提言と試論として受け止めていただくことも、あるいは可能であろうと思っている。

2、村上柴田翻訳堂とは

先述の村上柴田翻訳堂とは、以下に記すとおり、2016年4月1日の、カーソン・マッカラーズの『結婚式のメンバー』から始まり、2017年5月1日ナサニエル・ウエストの『いなごの日／クール・ミリオン ナサニエル・ウエスト傑作選』で終わる、合計10作品の新潮文庫の英米翻訳シリーズを指す。右の年月日は発行のそれを指す。

カーソン・マッカラーズ 『結婚式のメンバー』	村上春樹訳	2016年4月1日
ウィリアム・サローヤン 『僕の名はアラム』	柴田元幸訳	2016年4月1日
トマス・ハーディ 『呪われた腕 ハーディ傑作選』	河野一郎訳	2016年5月1日
フィリップ・ロス 『素晴らしいアメリカ野球』	中野好夫・常盤新平訳	2016年5月1日
コリン・ウィルソン 『宇宙ヴァンパイアー』	中村保男訳	2016年7月1日
マキシーン・ホン・キングストン 『チャイナ・メン』	藤本和子訳	2016年7月1日
ジェイムズ・ディッキー 『救い出される』	酒本雅之訳	2016年9月1日
リング・ロードナー 『アリバイ・アイク ロードナー傑作選』	加島祥三訳	2016年9月1日
ジョン・ニコルズ 『卵を産めない郭公』	村上春樹訳	2017年5月1日
ナサニエル・ウエスト 『いなごの日／クール・ミリオン ナサニエル・ウエスト傑作選』	柴田元幸訳	2017年5月1日

10 作品のうち、村上が訳出したものは、カーソン・マッカーズ『結婚式のメンバー』とジョン・ニコルズ『卵を産めない郭公』である。柴田が訳出したものは、ウィリアム・サローヤン『僕の名はアラム』とナサニエル・ウエスト『いなごの日／クール・ミリオン ナサニエル・ウエスト傑作選』である。これらも、もともとは先行訳、つまり既訳が存在したものだ。村上の担当した『結婚式のメンバー』は、渥美昭夫の訳で、1946年に中央公論社から、同じく『卵を産めない郭公』も、榊原晃三により『くちづけ』という題名で、1971年に早川書房から出版されていた。柴田の『僕の名はアラム』は、三浦朱門の『我が名はアラム』という題名で、1957年に角川文庫から、ナサニエル・ウエストの訳は、『いなごの日』が板倉章の訳で、1970年に角川文庫から、『クール・ミリオン』が佐藤健一の訳で、同じく角川文庫から1973年に出版されていた。(ともに作者名は、ナセニエル・ウエスト)『我が名はアラム』に至っては、清水俊二の手によって、実に1941年11月15日という、日米開戦のひと月前に、六興出版から出されているという歴史を持つ。

『結婚式のメンバー』の文庫巻末の付記によれば、「本書は、村上春樹・柴田元幸両氏が選んだ作品を新訳・復刊する新潮文庫《村上柴田翻訳堂》シリーズの一冊として新たに訳し下されたものである」とある。ここでは「新たに訳し下された」とあるが、他の箇所では「新訳」とも言われている。が、それらが初訳という意味ではないのは、以上に記したことで、明らかだろう。厳密に言うなら、ここで新たに訳されたのは、『いなごの日／クール・ミリオン』に収められたごく小編の「ペテン師」と「ウエスタンユニオン・ボーイ」の柴田による2作品のみなのではないか。

先に述べたとおり、この企画が開始されたのは、『MONKEY』vol. 7の柴田による対談後のあとがきによれば、雑誌掲載の約1年前にさかのぼる。すでにこの対談時に、村上にはマッカーズの『結婚式のメンバー』の訳を開始しているのが、「今僕が訳しているところですが」という彼の発言によって裏付けられる。シリーズの第1作目になる作品の翻訳の作業は、すでにこの時点で開始されていたのである。その1年5か月後に、村上訳『結婚式のメンバー』は世に出るのだが、村上はその間に、ハーディの『呪われた腕 ハーディ傑作選』とフィリップ・ロス『素晴らしいアメリカ野球』についての解説セッションを、2015年10月27日に行っている。自らの訳業が終えたから、対談に臨んだのか否かは不明だが、2014年の11月時点で訳を開始していた『結婚式のメンバー』は、11カ月の期間中には、ほぼ訳し終えられたと考えてよいだろう。こうして、2作品ずつの割合で、対談形式の解説セッションが、定期的に新潮クラブの一室で繰り返されていく。それを逐次記すと、以下のようになる。

トマス・ハーディ
『呪われた腕 ハーディ傑作選』 河野一郎訳 2016年5月1日

フィリップ・ロス
『素晴らしいアメリカ野球』 中野好夫・常盤新平訳 2016年5月1日

対談は、2015年10月27日

コリン・ウィルソン
『宇宙ヴァンパイア』 中村保男訳 2016年7月1日

マキシーン・ホン・キングストン
『チャイナ・メン』 藤本和子訳 2016年7月1日

対談は、2016年1月19日

ジェイムズ・ディッキー
『救い出される』 酒本雅之訳 2016年9月1日

リング・ロードナー
『アリバイ・アイク ロードナー傑作選』 2016年9月1日

対談は、2016年6月22日

順調に行われた二作品ずつの解説セッションの対談が、狂いを見せるのは、終盤の二作のときである。

ジョン・ニコルズ
『卵を産めない郭公』 村上春樹訳 2017年5月1日

対談は、2017年1月31日

ナサニエル・ウエスト
『いなごの日／クール・ミリオン
ナサニエル・ウエスト傑作選』 柴田元幸訳 2017年5月1日

対談は、2016年12月11日

翻訳堂の刊行は、月初めの1日に同時2冊のペースだった。ならば、この対談は、柴田の側の2016年12月11日か、村上側の2017年1月31日が、定例のはずなのだが、ここではひと月あまり、対談がずれ込んでいるのがわかる。一つの推測に過ぎないが、これは、柴田のペースに、村上があるいは追いつけなかったからではないだろうか。つまり、2016年の年末に、この翻訳堂の対談は、終了するつもりだった。しかし、何らかの原因で、村上の訳業に遅れが生

じ、それが翌月（そしてこの場合は結果的に翌年ということだが）に喰い込んでしまった。そして、この場合、遅れの要因として考えられるのは、新作である『騎士団長殺し』上下巻の追い込みのためと見なすが、もっとも自然な考え方ではないか。『騎士団長殺し』の刊行は2017年2月25日である。このように考えると、翻訳『卵を産めない郭公』と『騎士団長殺し』は、この2016年の暮れから2017年の新年時にかけて、平行状態にあったひとつの作品群と見なしでよいのではないだろうか。

3、『卵を産めない郭公』という作品

それでは、村上の訳した『卵を産めない郭公』とは、どのような作品なのか、解説セッションから、作者並びに作品についての情報を抽出してみよう。

『卵を産めない郭公』は、アメリカの作家ジョン・ニコルズが、1965年に発表した中編小説である。二人の大学生ジェリー・ペインとプーキー・アダムズの恋愛と破綻とを描いている。作者であるジョン・ニコルズは東部の名門大学の一つであるハミルトン大学を出て3年後の、25歳でこの小説を書いた。村上は「おそらく自分の実体験が入っているからでしょうが、非常にすらすら書けています」と言っている。それは、言い換えれば、村上の言うように、エリートお金持ち大学に通って好き勝手なことをしている、一組の男女ということになる。ジェリーは男子校の大学、プーキーは女子大に通っている。二人とも、寄宿寮に住んで、週末や大学の休みにバスや車を使って行き来することで、二人の愛を育むのだが、こうした設定をとった男女として、村上の過去の小説においてすぐ思い浮かべられるのは、やはり『ノルウェイの森』（1987年9月、講談社）だろう。『ノルウェイの森』の持つ新鮮さとは、学生寮というものを体験する主人公にあるのではないか。事実として、村上も学生寮に住んでいた。通常その和歌塾での体験が『ノルウェイの森』に生かされていると言われるが、それ以上に等身大の1年生として入寮して、様々な洗礼を受ける、ジェリー・ペインの存在は、きわめて身近な存在として彼に意識されたのではないか。

なによりこの主人公と『ノルウェイの森』のワタナベを繋ぐのは、内省的な一人っ子である「僕」という語り手の存在感であろう。『卵を産めない郭公』の主人公は、このように自分自身を語り始める。括弧内は、新潮文庫のページ数を表わす。なお、以下の引用の際にルビは省略している。

僕は年若い頃からずっと、一人でやっていく人間だった（それは「ひとりぼっち」という

のとは違う)。なぜなら僕はひとりでいるときがいちばん幸福だったからだ。(P40)

こういった「僕」を劇的に変えていくのが、この寮で「友愛会」として組織された上級生による入寮儀式の悪ふざけなどだった。が、それにもまして彼を大きく変えていったのは、偶然大陸横断バスで出会い、一方的に彼を好きになったプーキー・アダムズという変てこな女の子だったのである。

プーキーの人間像として、読者に強烈な印象を刻むのは、その性的関心に対する、あけすけな物言いだ。知り合ったグレイハンド・バスの隣の席で、プーキーが口にするあられもない言葉に、「僕」は思わず感電したようになる。

たしかに彼女には怒る権利があったと思う。でもそれはいくらなんでも怒り過ぎだった。ねえ、なによ、君ってひょっとしてキンタマでも落っこしちやったわけ、と彼女は言った。女の子が「キンタマ」という言葉を口にするのを聞いて、感電させられたみたいに身体が麻痺してしまった。(P42)

柴田によれば、この小説が発表された 1965 年はすでにベトナム戦争は始まっていたが、いまだ深刻化する以前だったと言う。すでにビートニク文化は西海岸では始まっていたが、東海岸のこうしたエスタブリッシュメントに近いところでは、いまだ影響が稀薄だったようだ。つまり、プーキーという存在は、自身の性的な関心をただあけすけに述べてしまえる女の子であって、それはいかなる政治性や差別感とも無縁にそうなのである。(ちなみに彼女はイリノイ州の出身である) これは、『ノルウェイの森』の緑を想像させないではいられない。実際、柴田の口からは、否定を前提とした言い方ながら、「プーキー的な魅力を持った登場人物は、「ノルウェイ」にも出てくる気もしますが、ちょっと違う…」という発言がなされている。このプーキーの持つ性的な放言は、予想以上に、ジェリーを追い詰めたと解釈できるのだが、それは童貞である青年が積極的な女子にたじたじとなりつつ、やがては満足する性的な関係を迎えていったという、物語の描く曲線以上のものがここには秘められていると考えられるのである。

実は、『ノルウェイの森』との関係をはかるうえで、このプーキーという人物への解釈の相違は、重大な差を生み出しかねない問題をはらむ。なぜかと言うと、この小説の書き出しは、以下のように、このプーキーなる人物が、自殺したことを暗示していたからだ。

何年か前のことだが、大学三年生の春学期に僕は、一人の女の子を棄てるか、それとも彼女と結婚するかという選択をするかわりに、彼女とのあいだの自殺協定に署名することに

なった。(P5)

彼と別れ故郷に帰ったプーキーが果たして本当に自殺したかどうか。たしかに最終章で紹介されるプーキーの手紙は、事実上の遺書のようにも読める。

ジェリー

私の前の机の上には睡眠薬が何錠か置いてあります。実を言えば長い間そこに置いてあったのだけど、ついにそれを飲もうと心を決めました。とことん全部。だから君がこの手紙を読む頃には、私はもうぼろぼろのクッキーみたいになっているはずです。(P351)

これを受け取ったジェリーの反応はいたって鈍く、地元の新聞による安否の確認さえ怠る始末で、その後の彼女を追うことをしない自分を、自身に言い聞かすだけなのだ。つまり、一方的にプーキーのフェイドアウトが行われ、それに対するなんらかの救済は一切ここでは拒絶された感じで、物語は終息するのである。その際の行き詰まりは、男性の主人公であるジェリー・ペインには負わされることはなく、ひとえにプーキー・アダムズという女性の側へとかけられていくのである。それがはっきりとたどれるのが、村上と柴田の「解説セッション」での発言である。

柴田 それから、タイトルなんかどうなんでしょうか。このなんか外したタイトルは。

村上 『卵を産めない郭公』。プーキーの詩から取ったフレーズですが、プーキーという女性を表わす言葉としては的を射ていると思う。

柴田 あ、そうか…そこはまっすぐ取って、いいんですね。

村上 僕はそう思いますね。彼女が不妊症だったということではないです。

柴田 なんかこう、彼女には先がない感じはありますが…。

村上 あくまで寓意的で象徴的にだけど、そういうなんか根本的なところが機能しないということを暗示しているかもしれません。一種のメタファーとして。僕はそう感じているんですけど。

村上と柴田にとって、プーキーという存在は、ジェリー・ペインという男性主人公の前を、青春のいつときわずかに通り過ぎた、風変わりな田舎娘であるとして、共通認識されている。そして、あくまで寓意的とされながらも、その根本にある種の「不妊症」というものを、抱え込んだ存在として見なしているのも確かだろう。言うまでもなく彼女のそうした自壊のプロセ

スの究極が、自殺であると認識されているのである。

4、sterile という言葉の意味

村上の漏らしているプーキーの詩とは、ジェリー・ペインとの仲がすでに回復不能になった際に、彼女の口から漏らされた即興の詩を指している。「卵を産めない郭公が叫んでいる」そして「卵を産めない郭公が死んでいる」とリフレインされるその詩はあくまで暗く、彼女が置かれた絶望的な状況を暗示しているように見える。村上は取り上げないが、この詩の題名は「F・S・フィッツ」となっており、あるいはスコット・フィッツジェラルドをも暗示する。村上がここで、「卵を産めない」と訳した原語は、sterile という単語で、それには、確かに、「不妊」という意味があり、郭公と結びつけた場合、「卵を産めない」と訳すのは、理にかなった選択だったと言えるだろう。先行訳の榊原晃三は、本の題名を『くちづけ』として、映画の邦題をそのまま踏襲しているが、該当の部分は、「子を生まぬカッコー鳥」としている。さらに言えば、冒頭に述べた『村上春樹翻訳（ほとんど）全仕事』では、村上のそれまでの訳出した本が写真入りで紹介されているが、その最後を飾るのが、この『卵を産めない郭公』なのだが、そのいまだ刊行予定として写されている本の題名は、『卵を産まない郭公』としてあり、刊行に際して、プーキーの「根本的なところが機能しない」という面がさらに強調され、『卵を産めない』となったことが、確認できるのである。

しかしこの sterile という単語は、現代では、女性側の不妊から、むしろ男性側の不妊を表わすのに、変化を来した語でもある。もともと、18世紀のイーフレーム・チェンバレンの『サイクロペディア』6版（1750年）などには、sterility の説明として the quality of a thing that is barren と説明され、用例として、Women frequently become sterile after a miscarriage or a difficult labour とあることからわかるとおり、それは、女性の不妊という状態を指していた。しかし、現代のアメリカに流布している NRSV 版の聖書（新改訂標準版 1989年）を見ると、男性と女性の不妊が厳密に分けられて記述されていることが見られ、その際、男性側に使われている単語として、この sterile が使用されているのが、確認することができるのだ。該当箇所は、モーセ 5 書の『申命記』の 7 章 14 節、日本聖書協会による『新共同訳聖書』では「あなたはすべての民の中で最も祝福される。あなたのうちには子のない男も女もなく、あなたの家畜にも子のないものはない。」となっている部分である。英語は以下のようになっている。

You shall be the most blessed of peoples, with neither sterility nor barrenness among you

and your livestock

日本語の聖書では「子のない」で、男にも、女にもかけているが、NRSV のそれでは、sterility と barrenness という従来、同義として使ってきた「不妊」という語を男女で区分化しているのが読み取れる。これは、このひとつ前の RSV 版の聖書（改訂標準版）には見られない傾向だった。RSV での該当箇所は、You shall be blessed above all peoples ; there shall not be male or female barren among you, or among your cattle となっており、これはいわゆる欽定訳のものをそのまま引き継いだ形になっているのである。ちなみに RSV の旧約の刊行は 1952 年、NRSV は 1989 年なので、1965 年に発表されたジョン・ニコルズの THE STERILE CUCKOO が NRSV の影響を受けるはずがないのだが、ここでもう一つ決定的に、この sterile を、男性の不妊へと押しやった作品があった。それは、1950 年に発表された、ジョン・スタインベックの『爛々と燃える』という作品である。

5、『爛々と燃える』の sterile

スタインベックのこの作品は劇用の脚本として作られたもので、かなり実験的な要素に富んだ作品だが、話の内容としてあるのは、自らを不妊と悩む中年の男と、それから救い出すために、あえて若い男と一度だけ関係して、子どもを産もうとした、若い妻の愛の物語とまとめられる。サーカスの曲芸師、そして興行師もしている、ジョー・ソールは自らの血統の絶えることに不安を覚えているが、若い妻であるモーディンとの間に、子どもがさずからないことで、苛立ちを覚えている。モーディンは養子を貰うことを願うが、そのためには、子どもの時にリ्यूマチ熱にあい、彼が不妊化した事実を、夫に伝えなければならない。それを聞いた、ジョーの仲間であり、親友であるフレンド・エドは、冷酷な事実を突きつけることの男性としてのショックを、次のように述べる。引用は、『スタインベック全集』第 8 巻（1998 年 6 月、大阪教育図書）で、訳者は中島最吉である。括弧内はページ数を指す。

「そんなことを話したらいけないと思うよ」とフレンド・エドは言った。「結果はよくないような気がする。男が自分に子種がないと知ったら、どんなことになるかわかるかね？」

(P 355)

この部分の英語を引くと、次のようになる。

“I don’t think you can tell him that,” Friend Ed said. “I don’t think that would be good. Do you know what happens to a man when he knows he is sterile?”

(Steinbeck, John. *Burning Bright: A Play in Story Form* (Penguin Modern Classics) (p.27). Penguin Books Ltd. Kindle)

この物語は、こうした、男性の不妊という事実を冷酷に追求した物語なのだが、ここで一貫して使われているのは、sterile という単語なのだ。スタインベックが、なぜこの語を扱っているのかは不明だが、ここで barren が使われることはない。題名の『爛々と燃える』とは、ウィリアム・ブレイクの詩から取った虎の眼を指しており、ジョーが心から望む強い男子の比喻である。ちなみに日本語で言うところの「子種がない」といういい方は、小学館の日本国語大辞典によれば、江戸時代の初期には、今のように、男性側の不妊状況を指す言葉として使われ出していた。

スタインベックのこの作品は、全集の用語では、劇小説となっているように、上演劇と不可分のような形で出版された。劇自体は、不評だったようだが、彼の志向する旧約聖書の世界観とどこか響き合うような作品とも言えるようである。彼が、なんらかのやり方で選出したこの sterile という語は、先述のとおり、おそらく現代の聖書研究における原ヘブライ語からの研究や解説の末に、聖書の旧約の世界においても、やがて定着されていったものだろう。もう一つ、医学的な用語として、すでに 1960 年代の日本において、『男子不妊症の臨床』（1967 年 9 月、金原出版）という医学書があり、その中で、male sterility という用語が登場しているのをここでは挙げておこう。つまり、1950 年から 60 年にかけて、barren と sterile は、分化して、それぞれのジェンダーを担うように、変化したものと考えられるのである。

6、THE STERILE CUCKOO における sterile の使われ方

実は、そうした眼であえて見なくても、THE STERILE CUCKOO における、sterile は、かなり特殊な使われ方をしていたのが、目に留まるのである。この語がまず登場するのは、例のプーキーが盛んに、出会ったばかりのジェリー・ペインを口説こうとやっきになっているところからである。性的好奇心にあふれかえった思春期を迎えたプーキーは、自分が「色情狂に違いない」と思い込む。そして「寄宿学校で自分が「ソーセージを分け合う」ような女の子たちの一人になってしまう」不安に苛まれたりもする。しかし、そんなこともなく、自分は、清潔な社会を汚す「孤独で大それた変質者」なんかではないことに、徐々に気づいていった。その体験から、プーキーは、変に取り澄ました態度を崩さないまま、バスの隣席に座っている、まだ名前も知らない「僕」に対しても、次に引用するように、実にあけすけな性に対する物言い

をするのである。

「ふん、どういうことだか、ちゃんと教えてあげるわよ」と彼女は言った、「まず第一に、君が生まれてこの方それを一回も経験していないとして、あるいは第二にもし経験していたとしても、君は自分の頭がどうかしているに違いないと思って、二回くらい夢精しちゃたり、サディスティックな夢を見たりしたあとで、あるいは目が覚めたらマスターベーションをしている自分を発見したあとで、自分はセックス・モンスターみたいなものじゃないかと考えて、それに打ち勝つには自分は生殖不適なんだと思ひ込み、女からは遠ざかっているしかないと決心したのだとして、もしそうだとしたら、うん、君にはまだ救われる道が残されているわけよ！」(P43)

原文は以下の通りである。

“I’m going to tell you what it’s all about,” she said, “just in case, one, you never experience it all the born days of your life, or two, you’ve already experienced it and thought you must have been out of your mind and decided after the first couple of times you wet your sheets and had a sadistic dream or woke up and caught yourself masturbating that you were some kind of a sex monster or something, and the only way to combat IT was to think yourself into sterility and stay away from broads, and if that’s the case, Brother, here’s hoping you can be saved!”

(Nichols, John. *The Sterile Cuckoo* (p.24). W. W. Norton & Company. Kindle)

ここでの「それ」というのを、念のために解説すれば、それは異性との性交渉、もしくはそれにまつわる突き上げるような自身の性衝動ということになるだろう。つまりこの時期、ちょうど思春期の入り口あたりで性に目覚めた頃には、男も女もそれぞれが、ひどく恥ずかしい一人よがりな妄想に悩まされるということを、プーキーは語って見せているのである。そして、プーキーから見た魅力的な顔立ちをしている、知り合ったばかりの「君」の性の段階を、妄想的に誇張して予想してみせて、自身を「セックス・モンスター」のように見誤ってしまう若者が陥る、一時的な性を遠ざける意識のはたらきを、sterility として表しているのである。榊原訳では「自分はだめなのだと思ひ」と訳されているが、sterility は男性としての機能が不全であるということでは必ずしもないので村上の訳んだ「生殖不適」の方がよりの確だと言えよう。ここでの sterility は、二つの点で、注目される。一つは、これが女性であるプーキーから、男

性であるジェリーに投げ掛けられている点。そして、その *sterility* という状態が、過剰な自身の性的な妄想から自身を切り離す手段といった、原義からはややずれる使用がなされているとはいえ、やはりあくまで男性の側の性の状態を指す用語として、ここで明確に機能しているという点である。

もう一つ、この作品内で使われている *sterile* も、はっきりと男性の側の「性」に直結したものとして、立ち現れている。ほどなく、二人は付き合い出すのだが、なかなか彼らのセックスは、「本番」に至らない。それは、村上が、例の「解説セッション」で述べていることを借れば、当時の若者にとって、セックスというものが、「すごく貴重なもの」「大事にしなくちゃいけないもの」だったためにほかならない。

まず、原文と、次に村上訳、榊原訳を順に載せる。

I fully clothed but for my jacket, tie, and shoes; Pookie likewise dressed but for her sweater and loafers—going through the official fornicating motions until, inevitably, I wet my pants and that was that. At the time, however, each new progress and each sterile climax seemed like earth's end to me, and I never heard Pookie really complain.

(Nichols, John. *The Sterile Cuckoo* (p.83). W. W. Norton & Company. Kindle)

僕はジャケットとネクタイと靴以外はすべて身につけた格好で、プーキーも同じようにセーターとローファー以外はすべて身につけた格好で、僕らは通常の性行為の動作をおこなった。その結果僕は避けがたくパンツを濡らすことになった。それでおしまい。でもそのときには、ひとつひとつの新しい進展と、ひとつひとつの不毛のクライマックスが、僕にとっては地球の果てみたいに感じられたものだ。(P145)

先行訳である榊原晃三『くちづけ』(早川書房、1971年6月)では、以下のようになる。

ぼくはジャケットとネクタイと靴以外はみんな身につけていたし、プーキーもセーターとスリッポン以外は身につけていた。形だけの行為を通して、僕はやむを得ず下着をぬらした。それがすべてだった。と言っても、当時、ぼくは二人の新しい進展と不毛のクライマックスが、この世の終わりのような気がしていた。(P99)

ここでのプーキーとのセックスとは、体をこすりつけた、一種の自慰に近いものだが、この時のプーキーは「こんなまだるっこしいことはやめて、裸になって、さっさと済ませちゃおう

よ」とは言わなかったと、ジェリー・ペインは述べている。村上は、ライザ・ミネリが主演した1969年のパラマウント映画を、「セクシャルな初々しさというのかな。そういうのがすごく良く出ていたよね」と言っているが、のちに常態化できたセックスから見れば、あくまで未熟な領域にとどまるこういった二人の性の段階は、映画には登場して来ない。この、一方的に「僕」が「パンツを濡らす」状態のことを、ジェリーの口から、sterile climax と呼ばれているが、これは、文字通りの性交無しの性の行為として sterile な climax ということで、辻褄が合うものだが、それでもそうした行為を続けることが、主人公にとって「地球の果て」のように感じられていったことが、しっかりと伝わってくるものと言えよう。なにより、この場合の sterile は、「僕」の中から自然に湧き出た言葉として使われているのが目につくが、そうであればあるだけ、sterile は、同義のはずの barren とは異なる意識のもとに置かれた言葉であることが、登場人物の内面で立証されたようなものではないか。つまり、この作品の中の、sterile とは、あくまで男性ジェンダーを意味する語として機能化されて登場していた、と考えられるのである。もう一か所の sterile の使用部分が、先の詩であるが、一体、sterile cuckoo を考えるうえで、「卵を産めない」とする根拠は、詩の最後に出てくる「彼女の魂」と、郭公を同一化する見方によって成り立つわけだが、この「郭公」という鳥自体も、どちらかという、男性表象の側に立っていた。特に、1960代中盤には、郭公はもともと英語に付随していた、「間抜け」や「気が違った」という意味を、より先鋭化して、男性化していた。言うまでもなく、ケン・キージの『カッコウの巣の上で』が与えた衝撃からである。

7、卵と無縁なカッコウたち

ジャック・ニコルソン主演で世界的に知られた『カッコウの巣の上で』（1975年、ユナイテッド映画）だが、映画と小説の最大の相違点は、小説においては、チーフ（酋長）と呼ばれる龔唾を装う巨人のネイティブ・アメリカンによって語られている世界だということだろう。しかし、最後にこのチーフ一人が、オレゴン州の精神病院から脱出することに成功することと、彼が、ロボトミーを加えられ真に白痴状態に陥ったマックマーフィを同情の気持ちから殺害したことは、ケン・キージの原作とまったく変わりはない。いわば、この物語のクライマックスは、「脱出」にあると言えよう。原題の ONE FLEW OVER THE CUCKOO'S NEST は、一羽のカッコウが巣の上を飛んで行った、という意味で、それがはっきりと伝わってくるのだが、日本では映画の邦題となった『カッコウの巣の上で』が一般化して、1974年10月に富山房から出版された、岩元巖の『郭公の巣』という初訳名もそれに合わせて変えられていった。ケン・

キージの原作を劇場用の脚本として作り直したデール・ワッサーマンのものを、小田島雄志・若子が訳しているが、解説で雄志が指摘しているとおり、これは『カッコーの巣の上を』が、原題に近い訳語と言えよう。

ケン・キージの原作は、1962年に発表されている。柴田は、先のセッションの最後で、小説で六〇年代の若者の三大バイブルと言われたのは、『キャッチ=22』と『カッコーの巣の上で』と『キャッチャー・イン・ザ・ライ』だったと述べているが、これと同様のことは、1974年の岩本による初訳である『郭公の巣』の「あとがき」の冒頭にすでに書かれていた。

アメリカにおいて第二次世界大戦後から今日に至るまで発表された数多くの小説のうち、特に若者たちの心を魅了しつくした作品が三つあると言われている。一つは、私たちの国でも広く読まれてきたサリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』（一九五一年）であり、また一つは、一九六一年に発表されたジョウゼフ・ヘラーの『キャッチ 22』である。そして、第三番目のものが、ここに訳出したケン・ケージ（Ken Kesey、1935-）の『郭公の巣』であるとされている。

『カッコーの巣の上で』は、精神病院の世界である。そこは病棟として、必然的に男だけに限られた空間であり、婦長を頂点とする看護婦のみが原則的に出入りを許された女性として登場する。例外は、型破りを続けるマックマーフィが連れ込んだガールフレンドであるが、それが遊び半分として許した性交渉によって、相手となった年少のビリーは自殺に追い込まれ、それがマックマーフィの婦長への発作的怒りと暴行へと繋がり、彼のロボトミー手術へととなっていく。

つまり、そこでは、病院の原則を破った「性」も、完全に sterile 化されていくのである。今映画を通じてこれを見ると、一婦長の権限があまりに強大すぎて滑稽な感をぬぐえないが、この徹底した男性性の無化は、sterile のもう一つの意味である「無菌」を想像させずにはいられない。それは、一種の断種の実行にもほかならない。その抵抗の中心人物だったジャック・ニコルソンの演じたマックマーフィは、隣れにも、彼だけが通常の性的な能力を有していたことを誇示したがゆえに、婦長の手によって、sterile を強制されるのだ。こうしたいわば、カッコーたちが、女性を指すとはおよそ考えられないだろう。精神を病むのに男女の差は、本質的にはないだろうが、英語にもともと付着していたと考えられる「狂ったもの」としてのカッコーのイメージは、あえて直観的に言えば、「男性的」だし、その延長で、この男だけの世界を表わす表象として、カッコーが題名として選び取られたとしたら、それは、少なくとも「卵」とは無縁ではないか。

もちろん、カッコーには、托卵という習性があるので、その意味で卵との親近感はあるのだが、ここではそういった産卵の比喩とは無縁のはずだし、もともとカッコーの「気の違った」という意味の発生も、托卵という奇妙な行動様式とともに、その単調な鳴き声に基づくものであることが言われている。そして、仮に柴田や岩本が指摘するように、この小説が六〇年代のバイブルとして、広く読まれてきたのなら、それだけ一層、ジョン・ニコルズの THE STERILE CUCKOO のカッコーが、ケン・キージのカッコーから逸脱したものとは考えにくいのではないか。柴田もその点が気になったらしく、二つの小説の題名の類似について、「勝手な想像ですけど、編集者とかは、ちょっとケン・キージに似すぎていませんかとか、言ったかもしれませんね」と述べている。逆に言えば、キージの「カッコー」を無視して、当時「カッコー」は、ありえなかったことを物語っていよう。両作の時間差は、わずか3年であるから、もっともだと言えるのだ。

8、sterile から fertile への変化の兆し

それでは、THE STERILE CUCKOO のジェリーに、あのスタインバックが付与したような、明確な sterile が認められるのか言えば、そうではない。しかし、プーキーとの仲が、決定的に彼の中で崩れていったときに、彼女から「いつか自分にも子供ができるだろうって考えたことはある？」と問いかけられた時であったのは、注目してよいことだと思う。プーキーの考えでは、赤ん坊を手にする事で、成長することで失ってしまった小さな心臓という大事なものを再び目にする事ができる、と言っている。性の放縦な先の物言いと異なり、ここでのプーキーは女性として、あるいは性差を超えて、子を持つこと、我が子と将来において出会うことの間人としての意義を明確に捉えている。ところが、この時に彼の中で、プーキーという女性についていくことができないことが、明瞭に意識されてしまうのだ。

「わかるよ。愛しているよ、プークス。僕は君のことを大きく深く愛して……君のことを深く広く愛して……僕は—、やれやれ、いったい僕は急にどうしたというんだろう？これほど深い圧倒的な失望感にとられるなんて。胃の中にこんなに唐突な冷気を感じるなんて。どこか遠くに行ってしまいたいと、かくも出し抜けに思い望むなんて。このままさっと跳び上がった、永久にどこかに走り去ってしまいたくなるなんて。僕は彼女の乳房に唇を強く押しつけた。彼女のこわばった指が僕の髪の中に滑り込んできて、僕の頭を彼女の胸により強く押しつけた。

「想像してみて、ハニー、私たちが一緒に子供だったなら…」(P291)

私はこの小説の二人のクライマックスはここであり、そのズレを描けたことで、この小説は村上が言うところの「青春小説」になり得たと考える。村上はここで、彼が古くから使い慣れた言葉である「やれやれ」をためらいもなく使っているが、ジェリーの中での気持ちの高まりがひどく切迫したものであったのは、プーキーの胸に押し付けた彼が涙を流したことでも明らかだろう。他人任せで、自己の意識がそれに伴ってあとから這い出てくるような「やれやれ」という語は、この場合「急に」という切迫感を相殺してしまい、ふさわしい表現効果を上げたとは思えない。ちなみに、榊原は「だしぬけに」と訳しており、原文の **What the hell suddenly was the matter with me?** には、普通に対応するだろう。不意にそういった感情に襲われたジェリー・ペインに余裕はなく、しかしそれだけ彼は自分に真摯だったとも言えるのである。そして敏感にその波動はプーキーを動かす。彼女は何らかのことが彼を深く傷つけたことを知り、「何かまずいことをしたのね」とうろたえるのだ。

あえて言うなら、これは「卵を産めない」ではなく、「卵を産ませない」カックロー(男)の話、我々の小説世界に無理矢理に置き換えてみるならば、妊娠を与えることのなかった、1960年代のアメリカの太田豊太郎だったと考えられはしないだろうか。村上の言い回しをここで借りれば、ジェリーが、sterile だったということではない。わかりやすく言えば、妊娠を望むような、あるいは口にするような女子に、愛しているよ、結婚したいよと口では言いながら、子どもをつくるということを想像した途端に、その女とはぜったいにノーだという男の湧き上がる正直さに苛まれた瞬間と、言えるのではないか。妊娠させたいと思う女子だけを男は愛しているわけではないが、逆にその女性を前に完全に sterile にかたまったときに、男性のなかで、自身の愛を見失うという心の動きはけっして軽視できないものだろう。特に二人が、ごく若い場合においては一層である。プーキーが何度か彼の sterile に言説上からも身体の上からも立ち会わされたのは、最後に来る、この彼女にとってわけのわからない不意に襲われる sterile、sterility に出会うためだった。この後の彼女の行動は、明らかに別れを前提化したものとは言えないか。そして、こうしたプーキーを、ジェリー・ペインが見えないのとちょうど同じように、訳者である村上には想像がつかないのではないだろうか。STERILE CUCKOO が、彼の中で狂うことなく、プーキーの側に傾けられ『卵を産めない』としているのが、なによりそれをよく表しているだろう。それは、柴田も同様かもしれない。彼らはともに、プーキーの「客体が分裂していった、收拾がつかなくなる」ことには敏感だが、それを語ってしまうジェリーという存在の不可解さには、批判的な言動が向かうことはない。そして、「しっかりネタバレから始まっているんですよ」という村上の言葉が表すように、あるいはそれを呼び込む柴田の「この小説

は、書き出しの一番最初の段階で、一番最後のことを書いているんですよ」という言い方からもうかがえるように、物語の終結をプーキーの死、自殺であることを前提としている。それは村上が、本来自身が影響を受けたはずのこの小説を、自らの『ノルウェイの森』のコードにおいて解釈し直してしまっている現象と捉えることはできないだろうか。

『ノルウェイの森』が、直子やキズキの死が前提となり、語りの起動が始められていくことはすでに説くまでもない周知の事柄だろうが、THE STERILE CUCKOO において、プーキーの死は、もう一度村上の言い方を借りるならば、それはあくまで暗示的で、「一種のメタファー」としてそうなのでしかないはずだ。(彼女は、『遺書』と言われるもののなかでも、「ぼろぼろのクッキーみたいに」と、自身への洒落を言う余裕すらあるのだ)簡単に言えば、直子たちのような自殺が、テキスト内で担保はできないのである。それが「ネタバレ」的に自明なのは、『ノルウェイの森』が村上の頭にあるからだろう。逆に言えば、プーキーの自死を前提にこの小説を読めるリテラシーが、『ノルウェイの森』の語りや自死の枠組みを与えたと言い直すことも可能だろう。だからこそ、このおそらく文学史的には重い位置を持つとは考えにくいこの作品が、村上にとっては、「20歳の頃に出会って、ずっと気になっていた小説」でもあったのだ。

村上は最新作の『騎士団長殺し』(2017年2月、新潮社)において、実子と出会う父、そしてその娘というものを書いた。これまでの文脈でそれを言い換えれば、それは sterile から fertile (多産、身を結ぶ)への変化の兆しととれなくもない。免色渉という人物は、はっきりと自身が生ませたことに確信的な父親として登場し、またそれゆえに成長した娘であるまりえに会いたいと心より願うからだ。それは、あるいは、THE STERILE CUCKOO の状況が、正確に転倒された布置とも見てとれよう。そして、この小説の読者は、物語の終局で、主人公である「私」もまた、我が子でないことが確実な娘の父親という選択をあえて引き受けていくことに会うことになるのである。「私」という語り手である主人公は、離婚されそうな夫から、一気に「父」となるのだ。この物語が抱える9カ月という時間は、結果的にその決断を引き出すために要した時間そのものを指し、なおかつそれは、前作の長編である『1Q84』における天吾の薄い、成り行きの自分の子どもの認知のあり方と比べた際、はるかに内面化されたおもい決断として読者に刻みつけられはしないだろうか。

長編である『騎士団長殺し』を書くさ中であって、その程度は不明だが、THE STERILE CUCKOO といっとき平行状態にあったことを思い合わせると、彼の創作小説と翻訳との関係に、新たに注視しなければならないような視座を与えてくれるものとしても、この翻訳の意味を問うことは、改めて重要であろう。自己のなした翻訳から本質的には飛躍したところでしか、自身の創作活動を行わないはずの村上春樹ではあるが、彼の意識とは別に、「究極の精読」(『全

仕事』まえがき)を強いるその訳業と、もとより彼が言い放つ言説とは、いったんは切り離れたうえで、その **fertile** な状態がもたらす内実の検証が必要となるべきではないか。彼の翻訳の原点とも言え、最も愛着の深かったはずのレイモンド・カーヴァーの「ささやかだけれど、役にたつこと」(1988年10月、「文學界」)では、「子供も持たずに生きてくる」ことの苦しみがそれを失う夫婦の目から等価的に描かれていたが、それからおよそ38年の歳月を経た2016年から17年にかけて、**sterile** と **fertile** の両極の間を、彼は柴田元幸という翻訳の絶対的な伴侶とともに、大きく振幅していったものと考えられるのである。

- * 本稿の一部を、日本比較文学会東京支部大会の4月例会(2018年4月21日、東京工業大学大岡山キャンパス)において口頭発表したことを付記しておく。